

せて研究しなければならない。科学の進歩は研究が分化することによってなされたと考えてもよい。しかし生活・被服などの学問は分化したものを必要に応じて総合しなければならない。被服は人間・社会・歴史などの反映とも見られ、自然科学的に研究しうる面よりも文化科学的な研究をまたねばならない面をより多く持っているといえよう。

B-69 被服学の研究方法について

静岡女子短大 柳原 文一

1. 研究の目的 被服学はまだ体系的な学問として認められていないようである。私はこれを体系ある学問として認められるものになりたいと思っているが、この小論ではこの問題に研究方法の面から近づこうと試みた。

2. 方法 これは『被服学原論』の一部ともいうべきもので、もちろん被服学に対する仮説である。従って哲学および論理学的方法によるものである。

3. 成果 被服学の対象は被服という『もの』である。しかしこの被服という『もの』は単なる物質ではない。自然科学的方法のみでは研究されえないものである。繊維や布の物理・化学的研究のみでは被服の研究とはいえない。また生理および衛生学的研究は繊維および布の研究より一歩被服に近づいてはいるが、やはり『生存』の研究にとどまっている。即ち被服は人間の『生活』との関連においてとらえねばならない。生存と生活とは『文化』の点において異なるといつてよい。いいかえると被服は単なる『もの』としてでなく、人間との関連において歴史・社会・人間の心理・思想等とも関連さ